



【記念品を届ける】 「初めて行って見て、陸前高田はどうだった？」9月25日の朝、担任の先生にそう聞かれた、下福田中学校の「交流会実行委員」の一人の男の子は次のように答えました。

「うまく言葉にできないくらいのショックだった。破壊された市役所やスーパーは、まだそのまま、とても悲惨な様子だったし、街が全くなくなって、いまはもう草が生えて野原みたいになってしまっているし……。本当に何にもなかった。だけど、瓦礫の山だけはあちこちにたくさんあって……。」感じた衝撃を、そのまま素直なことばで話してくれました。続けて、このようにも語ってくれました。「前に陸前高田に行った実行委員のメンバーから、そのような事も聞いていたし、ビデオや写真で教えてもらったけど、やっぱり実際にみるとぜんぜん違った。思っていた以上だった。交流会の前に僕もみていたら、小友中の人のことばを、もっと違って受け止められたかもしれない……」

交流会で、記念品として下福田中から小友中に渡す約束をしていた「ブックトラック」を、9月24日（月）の朝の学活の時間におじゃまして、実行委員の男の子3名が手渡しました。3名は、まだ陸前高田を訪れたことがないメンバーでした。運動会の代休を利用しての小友中訪問です。この記念品は、下福田中のボランティア委員が毎月街に出て、震災支援のために呼びかけて集まった募金から買ったものです。

前日の夜は広田の仮設住宅に宿泊して、8時30分に小友中学校に到着すると、ちょうど朝読書の時間。3年生は一階の教室です。前日の雨もやんで、この日はさわやかな秋空。教室の外にあるテラスの窓を開け放って、みんな静かに読書に集中している様子。交流会での引き締まった表情とは違って、とっても穏やかな雰囲気です。1ヶ月しかたっていないのに、なぜかとっても懐かしい気がします。すたんどばいみーから送られた「ばいみー本※」は読んでくれたのでしょうか。車から降りた私たちに気がついて、テラス越しに男の子が大きな声で「おはようございます」と挨拶をしてくれたので、それにつられてみんなの顔が一斉に向けられました。

加藤校長先生にご挨拶をして、担任の先生と一緒に3年の教室に向かいます。小友中の子どもたちの表情は明るく、目の色にわくわく感が読み取れます。緊張しているのは下福田中の3人。

下福田中の代表者が話し始めました。

「7月25日から8月30日までの長い期間を費やし、一緒に作り上げた交流会。様々な苦労がありました。しかし、この交流会は、そもそも、小友中のみんなが、僕たちの招待を受けてくれたことから始まったと思います。みんなが招待を受けてくれなければ、決して行われることはなかったでしょう。僕たちの招待を受けてくれたこと、一緒に交流会を作り上げてくれたこと、そしてお礼の手紙を書いてくれたこと、本当にありがとうございました。交流会が終わった直後の給食の時間、『なぜ小友中の人たち、一緒に食べないの？』と何人もの人に言われました。また、『夕食会は何時から？』とか、『明日のお別れ会は何時？』など、みんなが小友中のみんなのことで頭がいっぱいでした。交流会の翌日、下中では交流会の作文



を書きました。今回は下中を代表してK君に作文を読んでもらいたいと思います。」

ちょっと恥ずかしそうに作文を読み始めました。そこには、ホームステイしてくれた小友中の人から、やがてはしっかりと津波のことを聞かせてもらえるような関係をつくっていきたくし、いろいろなことを教わっていきたくしと思ったことや、すたんどばいみーのことばに心うたれたことなどが綴られていました。

作文を引き受けて、また代表者がことばをつなぎます。

「今回は下中の代表としてK君が作文を読んでもらいましたが、近々発行する報告書に、実行委員と学年の代表の作文を載せたいと考えているので、ぜひ読んで下さい。

ここに来るまでに、交流会が終わってから長い間があいてしまいましたが、この間に下中では沢山のことがありました。交流会直後にこちらではテストがあり、実行委員のテストの結果は悲惨なものでした。また、テストが終わってすぐに運動会練習が始まり、おとといの22日に本番が終わったばかりです。

最後に本題ですが、今日僕たちがここに来たのは、お別れ会でお話しした記念品を渡すためです。僕たちと共におこなった交流会の思い出の一部として、大切に使ってくれたらうれしいです。」

小友中の子どもたちは静かにじっと聞いています。その姿は緊張ではなく、朝からの珍客の登場を喜んで、わくわくしていながら、ちょっと「よそ行き」の表情をつくっているよう。小友中の生徒代表がお礼のことばを伝え、一段落すると、案の定、笑顔がこぼれ、雰囲気は一気に親しい友だちとしてのものに変化しました。

「もっと話そうよ。」「次の授業つぶしちゃダメですか？」
……うちとけたやりとりを楽しみながらも、下福田の生徒はおいとまをすることになり、みんなで記念撮影。教室から手を振るみんなにお別れを告げて、3名の実行委員はその役目を終えました。

今回の「旅」の感想を簡単にまとめてくれました。



僕は今回小友中のみんなに記念品を渡すために、初めて被災地に行ってきました。僕たちが向こうに着いたのは夜のことで、周りの景色はほとんど見えませんでした。しかし、ところどころに電灯があり、その光は馴染みないモノに感じられました。その日は仮設住宅に泊まり、翌日の小友中に記念品を渡す際の確認を行いました。翌朝は早くに仮設住宅を出て、周辺を見て回りました。そこで見た景色はなんと異様でした。前日の夜感じたとおり、何もなく、草原と呼ぶにはみすばらしい草の生えた土地があるだけでした。また、たまにある民家はどれも新しく、もともとそこにあったものとはちがうことが一目でわかりました。周辺を見て回った後、小友中へいきました。そこでは、みんながあたたかく迎えてくれて、幼い頃の友人に会ったような、そんな気持ちになりました。みんなと一緒に過ごせたのは、たった数十分間でしたが、みんなの顔を見たとき、わざわざ来た意味があったと感じました。

陸前高田へ行ったり、大和へ来てもらったりの交流ですが、時間をかけながらの交流はいまでも続いています。子どもたちから、「電話が来たよ」という話を聞いたり、ホームステイを引き受けてくれたご家庭からは、「この間思いがけずサンマを送っていただいて、お礼の電話をしたら、長話になっちゃって・・・」、そんな話も聞こえてきます。

「未来に向けてのパートナーシップ」をめざしての、被災した経験を持つ人々と、非被災地域で暮らす人々、そして、外国人として様々な生きづらさを抱えながら生活する人々の出会いは、やっと始まったばかりなのです。

【ソフトテニス教室を開催】

下福田中学校の卒業生に、ソフトテニスの選手として活躍している人がいる・・・という話が伝わって、小友中学校のソフトテニス部の顧問の先生から、「ぜひ一度指導に来てもらえないだろうか」ということから、9月17日のソフトテニス教室開催となりました。

松口選手はヨネックスの選手として活躍し、日本のナショナルチームとして現在も活躍しているトップ選手です。

忙しい身体でも、「被災した子どもたちの役に立てるのならばぜひ参加したい」という思いから、国体の対抗戦を欠席して講師役をかってでてくれました。前日は夕刻まで千葉に出張。松口選手が陸前高田の仮設住宅に到着したのは、もう0時をまわる頃。

朝は少し被災の傷跡をみてまわり、会場である「スポーツドーム」到着したのは9時ちょっと前。会場の入り口には、教室に参加する小友中学校、広田中学校、米崎中学校のテニス部員たちが待っていてくれて、歓迎ムードいっぱいです。

実は、この教室に参加した三校は、3月での閉校と4月からの合併が決定しています。つまり、4月からは同じ学校のテニス部員として活動することになるのです。教室開催が決まったとき、小友中の顧問の先生が他の2校の先生に声をかけ、「ちょっとでもこういう機会を生かして、4月からスムーズに合併できるようにしよう」という配慮から3校での合同参加となりました。復興に向けて、大きく形を変えざるを得ない中、私たちでは想像できないこうした細かな配慮が、至る所で必要になっているのかもしれませんが、先生方のそうした思いを生徒たちも分かっているからか、お互いがちょっと意識しているムードです。

「テニスを楽しく元気よくやってほしい・・・」。松口選手はそんな思いを込めて、練習を紹介し、一緒にプレーを楽しみます。「上手に」よりも「楽しく!」。講習のお手伝いとして参加した、下福田中の柿本校長先生の息子である航哉さんも、だんだんと中学生のペースがつかめたよう。各中学校のコーチや先生も入って、「大人と打ち合おう」という練習では、ドームの中が熱気に包まれました。初めは意識していた子どもたち同士の距離も、少しずつ縮まったようです。講師の松口選手も、そうした子どもたちの様子を察してか、模範プレーでは、必ず各校から選手を選び、プレーが終わるたびに、全員で拍手を送るようにしていました。

たった一日のテニス教室でしたが、三校の子どもたちが顔を合わせて、一緒にラケットを振ることができたことは、何よりの収穫だったのではないのでしょうか。

来年4月の統合後、きっと子どもたちや学校は、様々な当惑や混乱を経験することになるのだと思います。それでも「新しい学校づくり」にむけて、先生も生徒も、一緒になってそれらを乗り越えていって欲しいと、いまから願っています。



【万石浦からの手紙】 万石浦のライオン学校の一人の男の子から、9月の初めに往復はがきが届きました。3月のお別れの時に、「SOSの時は、これに書いてポストに入れてね! 必ず来るから・・・!」と約束しながら渡した中の1枚でした。ちょっぴり読みづらい字で、それでも一生懸命に書いたことが伝わってくる文面でした。

〇ぼくがいま、こまっていること

Yにおっかけ回されたりたまにいじめられたりしている。特に学校ではつねられたり、たたかれたり、時には首をしめたりしてくる。自分的にはYが悪いことと良いことを理解してあまり追いかけて回さなければいいと思う。

校長はどうすれば直ると思う?

あと!! 冬休みに校長家に行く予定になってるから(〇〇と) もし時はよろしく!!

手紙をくれたT君は、どうやらY君のことで困っている様子。普段からY君はT君のことが大好きで、ライオン学校に来てそのそばを離れません。1年ほど前に小学校の授業参観を覗きに行ったときも、何を話すのも、何を聞くのも、Y君は斜め後ろのT君に向かってです。クラスの中でもちょっと浮いていて、T君を手がかりにして集団の中に見えるように見えました。そのY君のT君への「こだわり」が、ちょっとT君にとっては「重荷」になり始めているのでしょうか。

9月16日、連絡していたとおりにT君の家を訪ねると、声をかける前に出てきてくれました。気にして外を見ていてくれたようです。サポートセンターでゆっくり様子を聞くと、この頃は首をしめてきたりつねったりはなくなってきたとのこと。Y君を交えて話をしようと考えていたのですが、まだ大丈夫、とのことで、Y君と上手につきあっていくことをお願いし、この話を終えました。T君もいままでとは違った人間関係をつくりながら、一歩前に進もうとしているようです。そんななかで、取り残されてしまう不安をY君は感じているのかもしれませんが、Y君のことがちょっぴり心配になり、遠く離れていることのもどかしさを感じた支援でした。

【支援隊活動記録】 ■陸前高田支援 ○9月16～17日(第47回): 小友・米崎・広田中学校テニス部支援、Cafe まつぼっくりへの荷物搬入 □支援隊メンバー: 柿本隆夫(下福田中学校)、松口友也(ヨネックス)、柿本航哉(慶應大学学生)、清水睦美(東京理科大学)、古浦信司(東京理科大学学生)、藤原弘輝(光明相模原高校)

○9月23～24日(第48回): 小友中学校訪問 □支援隊メンバー: 柿本隆夫(下福田中学校)、町田隆拓・河端勇人・内田恭平(下福田中学校交流会実行委員)

■万石浦支援 ○9月15～16日: 万石浦ライオン学校家庭訪問 □柿本隆夫(下福田中学校)、清水睦美(東京理科大学)、古浦信司(東京理科大学学生)、藤原弘輝(光明相模原高校)

■寄付 皆川イツ子、権田和子、佐々木善仁(教育支援チーム「まつ」事務局長)

★★今年度末まで支援を継続しますので、今後ともどうぞよろしくお願ひします★★

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (Edベンチャーヒガシニホンダイシンサイエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp



この事業は、赤い羽根「災害ボランティア・NPO活動サポート募金」助成を受け実施しています。